

地域情報（県別）**【神奈川】「24時間外来」が評価され、県救急医療功労者表彰を受賞-村田尚彦・村田会湘南台内科クリニック院長に聞く◆Vol.1**

2019年12月9日(月)配信 m3.com地域版

「村田会湘南台内科クリニック」（藤沢市）の院長の村田尚彦氏は2019年9月、神奈川県救急医療功労者表彰を受賞した。藤沢市医師会の理事として地域の救急体制の整備に取り組んだほか、一開業医としても尽力。開業から10年にわたって「24時間体制」を敷き、夜中や土日も患者を診続けたという。「具合が悪くなったら夜中でも気にせずうちに来て」。村田院長がそう患者に声をかけ続けた理由とは一。（2019年10月18日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら

——2019年度の神奈川県救急医療功労者表彰を受賞しました。まずは感想をお聞かせください。

名誉なことだと思います。神奈川県救急医療功労者表彰は25年ほど続く歴史のある賞ですが、藤沢市の医師が毎回選ばれるわけではありません。その年によって対象となる地域とそこから選出される人数が決まっていて、藤沢エリアが対象になるのは3年に1回くらいです。すると、これまでに受賞した藤沢の医師は計算上では8人ほどですから、価値の大きなものだと感じています。



院長の村田尚彦氏

——県の資料に「地域の初期救急医療に貢献した」とあるのですが、具体的にはどんな活動を行ってきたのでしょうか。

開業医ならびに藤沢市医師会の理事としての活動が評価されたのではないのでしょうか。私は1993年に当院に近い別の場所で開業したのですが、当初は24時間体制で患者さんを診ていました。藤沢市医師会の活動としては5年前から「救急」「災害医療」「休日診療所」の部門を担当し、理事としては今年で3期目を迎えます。7月からは「休日診療所」の担当を外れ、代わりに新設された「高齢者救急」を担当しています。一医師としてだけでなく、藤沢市医師会のメンバーとして包括的に地域の救急体制の整備に取り組んできたことも評価されたポイントだったのでしょうか。

——「24時間体制」とは、ずっと外来を開いていたということでしょうか。

はい。形式上は閉めていましたが、患者さんがいらっしゃれば夜中でも土日でも関係なく診療していました。私はもともと、開業する際に「患者さんにいつでも関われる診療所にしたい」と考えていたんですね。ですから広めの物件を探して、2階を自宅に、1階を診療所にしました。私の専門は呼吸器内科で、例えばぜんそくの患者さんを診療していた時に悪化の可能性があるようだったら、「夜に具合が悪くなったときはうちにおいでよ」と声をかけるようにしていました。

ほとんどの医療機関が閉まっている夜中でも診てくれる医師がいれば患者さんは安心しやすいでしょうし、救急医療の負担も減るだろうと考えたのです。お酒を飲んでいる休診日の夜に電話がかかってくることもありましたね。

「少しお酒入ってるけどいい?」「いやいや、先生だからいいよ」なんてやり取りを交わすこともありました。

——すごいですね。そんな医師は減っているように思いますが、先生はなぜそこまでやっていたのですか?

勤務医時代の経験が大きく影響しています。私が大学病院に勤めていた時、救急搬送されて来る人の中には死の危険性の高い人が少なくありませんでした。しかしながら、そういった人たち全員が仕方なしにそんな状態に陥っているかという決してそうではなく、地域の医療機関で早めに適切な対応ができていれば悪化を防げた人も多くいたのです。「もっと早く診療されていればもっと早く楽に助かったのに…」。そんな思いが高じたことに加えて、そもそも患者さんを外来で診るのが好きだったことから、「患者さんがいつでも相談できる身近な診療所を作ろう」と開業しました。

確かに、周囲からは「時代に逆行している」と言われました。開業当時は既にビル診療所が増えていて、自宅が併設されている診療所は減っていました。でもなぜ、「逆行」と言われるのかかというと、それは開業することで楽をしたい医師が少なくないからではないでしょうか。前提として、当直がなく病気の重い患者さんが少ない開業医は大学病院勤務に比べれば非常に楽です。私は当時35歳でしたから、「若いのに楽をしてはいけない」といった気持ちもありました。



同院の外観

——「初期救急医療に貢献した」という評価の意味は、「自分がいつでも診ることで救急の機会を減らす」ということだったのですね。

そうです。今でも覚えています。ある日曜日に患者さんから「ぜんそくで苦しい。先生、行っていいですか?」と電話がかかってきました。「いいよいいよ、開けとくよ」と答えた私は、程なくして来院した患者さんを診ました。点滴を入れた後だったでしょうか、診療が始まって少しした後に患者さんの様子が変わり、「苦しい」と訴えられたまま息が止まってしまったのです。私はすぐに器具を出して挿管をし、気道を確保しました。と同時に、救急車を呼びました。その結果、患者さんは一命をとりとめました。家で我慢していたらもしかすると、その方は亡くなっていたかもしれません。

当院は現在、19床を持つ有床診療所であり、介護老人保健施設や有料老人ホーム、デイサービスセンターを運営する医療機関としてはちょっと特殊な法人ですが、こうした形態に育っていったのは、「地域の患者さんが安心・安全な医療を受けられるようにしたい」「地域の患者さんが遠方に行かなくて済むように、なるべく地域の中で医療や介護が完結できるようにしたい」といった思いがあったからです。2003年に診療所をこちらの場所に移転するまで24時間体制で診ていたのも根っこは同じです。

今でいう「地域包括ケア」を20年以上前から推進してきたわけですが、2020年7月には72床を持つ病院を開院する予定ですので、これでひとまず、イメージする地域包括ケアが形としては完成することになります。

◆村田 尚彦（むらた・たかひこ）氏

1984年、防衛医科大学卒。自衛隊富士病院などを経て1993年に開業。地域包括ケアの実現を目指して、有床診療所「村田会湘南台内科クリニック」のほか、介護老人保健施設や有料老人ホーム、デイサービスセンターも運営する。2020年7月には「村田会湘南大庭病院」をオープンさせる予定。2019年9月に神奈川県から県救急医療功労者表彰を受賞した。専門は呼吸器内科。

【取材・文・撮影＝医療ライター 庄部 勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

